

雍正初年の戸部銀庫虧空事件からみた清朝支配構造の特質

鈴木 真

はじめに

本稿は、雍正初年の戸部銀庫清查の結果明るみにでた虧空事件の原因と、八旗に代表される清朝の支配構造との関連を、事件に対する雍正帝の対応策から検討するものである。

清朝では聖祖康熙帝（位一六六一―一七二三）治世の後半期に財政綱紀が弛緩した結果、地方衙門における虧空や官僚の不正を助長した。この状況を熟知していた世宗雍正帝（位一七三二―一七三五）は即位後、直ちに財政改革に積極的に取り組んだ。雍正帝が皇帝権力を確立するとともに、康熙年間に疲弊した清朝財政を立て直し、続く乾隆六〇年間の繁栄を支えることになった点に関しては、多くの先行研究によって既に指摘されている¹。

無論、歴代の王朝においても、皇帝権力を経済的に裏付ける国家財政の掌握は常に追求されてきたのであり、清朝も例外ではない。ただ清朝において国家財政再建の文脈で描かれる雍正帝像は、多分に中華皇帝としての雍正帝であり、国家財政上の重要課題である虧空の原因にしても、その多くは官僚の不正といった常識的な理解の域を出ない。しかしながら歴代の王朝においてもその王朝の特質に応じて様々な財政問題が発生していたはずであり、清

朝の虧空問題と雍正帝の実施した国家財政の綱紀肅正にも、清朝特有の原因と意義を見出すことも可能であろう。換言すれば、満洲族に代表される八旗の旗人が支配層を構成する清朝においては、その構成原理に起因する財政問題が発生していたはずであり、雍正帝による国家財政の掌握およびそれと不可分の関係にある皇帝権力確立への意思——それが結果的に達成されたか否かは措くとして——にも、清朝独自の意味と過程とが見出せると考える⁽³⁾。

第一章 戸部銀庫の虧空事件

清朝の国家財政については岩井茂樹氏の研究⁽⁴⁾があり、これを「正額錢糧もしくは広義の正項錢糧にかかわる財政の体系⁽⁵⁾」とした。清朝における主要な正規の税収は周知のように、地丁（銀）・塩課・関税であり、なかでも州県より徴収される「地丁」が正項錢糧の大部分を占めていた。これらのうち留支・協餉を除いた部分が戸部銀庫に送られた。これと戸部銀庫に直接納められる捐納銀を合わせると、戸部銀庫の一年の収入は、銀一千数百万両、同支出は平常時には銀一千万両前後であった⁽⁶⁾という。ただし錢糧は必ずしも毎年定められた額が、戸部銀庫まで送られてくるわけではなかった。錢糧の納入はしばしば遅延・欠損していたのであり、帳簿上では存在するはずの銀が実際には存在しないという虧空問題が、往々にして起こったのである。その背景には、康熙朝の寛容な治世、さらには、各省の布政使庫における貯藏銀の現状を戸部が把握し難い点⁽⁷⁾がある。雍正帝は雍正元年（一七二三）に錢糧関係を管轄する会考府を新設した⁽⁸⁾ほか、怡親王允祥の献策を容れ、各布政使庫における貯藏銀量の現状を把握するため「酌撥条例」を定めた。

以上が岩井氏の論述する、錢糧が徴収されて戸部銀庫に納められるまでの制度的概要である。ただ「酌撥条例」の採用によって、定められた額の地丁が円滑かつ正確に戸部銀庫に送られて来たとしても、その貯蔵場所で不正があれば何の効果もない。そのため雍正帝は腹心の異母弟である怡親王允祥（康熙帝十三阿哥⁽⁹⁾）に命じ、国家財政の基である戸部銀庫での不正摘発に乗り出したのである。允祥の戸部銀庫清查の詳細について岩井氏は特に言及していない。また、戸部銀庫の先行研究を整理した岸本美緒氏は、中国第一歴史檔案館所蔵の戸部銀庫黃冊により、戸部銀庫に貯蔵されていた銀の総量を分析した⁽¹⁰⁾。ただ岸本氏の場合は、統計的分析にその主眼があるため、雍正初年の戸部銀庫問題、とくに虧空の具体的原因にまでは深く論及していない。

前述のように、戸部銀庫には地方より送られてきた銀が貯蔵されており、これらの銀は京師における八旗の経費や中央官僚の俸給に充てられた。雍正元年新設の管理戸部三庫大臣（以下、三庫大臣と略記）は銀庫・緞疋庫・顏料庫を管理するが⁽¹¹⁾、この三庫大臣の重職に初めて就いたのが怡親王允祥である。允祥は雍正帝即位と同時に正藍旗の和碩親王に新封され⁽¹²⁾、国政に参与することになるが、その最初の任務のひとつが戸部銀庫清查であった。允祥は雍正元年当時、総理戸部事務として滿漢の戸部尚書よりも上の立場にあり、戸部三庫を管理するのみならず、財政問題全体に關与する最高責任者ともいうべき存在であった。

この三庫大臣に直屬するのが、戸部銀庫郎中・同員外郎（当時は滿洲各一名⁽¹³⁾）であり、当初この職に就いていたのがそれぞれ鑲白旗滿洲旗人のボルド（Bordo 博爾多⁽¹⁴⁾）と鑲白旗蒙古旗人のブランド（Bulantar 布蘭泰⁽¹⁵⁾）であった。戸部銀庫清查の実務を直接担当した官僚が、ともに鑲白旗の旗人であったことは注目すべきである。雍正帝自身が

親王時代には鑲白旗に封旗されていたことと、下五旗の旗人たちが皇帝よりも直属の旗王の掣肘を受けていたこととを考慮すると、両者の任命は、即位間もない雍正帝が自らの意思を反映させやすい鑲白旗人に重責を委ねたためと考えられるからである。とくにボルドは、『雍正朝起居注冊』雍正五年二月七日条に、

上曰く「議に依れ。博爾多^{ボルド}は朕の従前よりの藩邸旗下の人に係る。挙人の出身にて文理に粗通するに係るに因りて、戸部の司官と為す。怡親王奏称すらく、『伊は操守好く、辦事去得たり』と。朕は因りて授けて布政使と為す……」と。

とあるように、親王時代の雍正帝に仕えた、いわゆる雍親王藩邸旧人⁽¹⁸⁾であつた。ボルドは銀庫郎中に加えて雍正元年九月一日より山東布政使も兼任しており、⁽¹⁹⁾藩邸時代以来の雍正帝の腹心として銀庫郎中に就任したと考えられる。このように雍正帝は信頼する怡親王允祥やボルドラをまず派遣して、戸部銀庫清查に着手したのである。

この清查の結果は『大清世宗憲皇帝実録』卷二六、雍正二年十一月癸丑（二三日）条に記されている。ただし同記事からは雍正帝がすでに康熙年間より戸部銀庫の虧空に気づいており、虧空の原因として官僚たちの掠取を挙げていることは分かるものの、それ以外は未詳であつた。そこで允祥が筆頭上奏者である雍正二年四月一四日の滿漢合璧奏摺⁽²⁰⁾によつて事の経緯を具体的に述べてみる。

康熙六十一年（一七三二）の戸部の奏摺によれば、戸部銀庫には金約二万五五五〇両、銀約二七一二万両が貯蔵されてゐるはずであつた。⁽²¹⁾しかし怡親王允祥の清查の結果、金約五〇〇両、銀約二五九万両という莫大な量の虧空が発覚した。これに対して允祥は、

臣我がいくら考えても、年月は甚だ久しく経っており、何年から虧空するようになったのかは、知ることができない。とはいえ、国家の正項の錢糧に関わることは甚だ重要なので、康熙三十一年以降に戸部に在職した大臣たち、(銀)庫に在職した官僚たち全員と何度も会議し、これらの在職年の長短を考慮した上で、分担して償還させる際に、原任侍郎の張世爵ら総勢一〇人は「(我らに)受け持たせた、償還すべき一二万五〇〇〇両は、一年の期限内に数のとおりに完納したい」といった。……まったく任せた数のとおり請け負わない、まったく分厘も償還しない輩について、臣我が考えるところ、悉く満洲旗麾下の人 (gusai manju harangga niyalma) である。

と述べている(満文から訳出)。允祥は康熙三十一年以降の戸部官僚らに分担させて銀庫の虧空銀を償還させようとしたが、一部の官僚は些かも償還しようとせず、しかもその官僚がいずれも満洲旗人だったのである。日夜激務に追われ、対応に苦慮した允祥は、雍正元年まで戸部尚書をつとめ当時は工部尚書の任にあった満洲大臣のスンジヤチ(Sunjaci孫渣齊)に戸部銀庫虧空の実情を究明させるよう雍正帝に願ひ出た。さらに允祥は、雍正元年以降に国庫に納付されるべき平餘銀一〇万両と、戸部の飯銀三万両の併せて毎年銀一三万両を、今後一五年間(総計一九五万兩)に互つて戸部銀庫の虧空に補填させるよう提案した。しかしながら雍正帝はこれを退け、

庫の銀を二、三〇〇万虧空させ、新たに収めた銀により補填し、一五年払いにしたいと上奏し、前の(戸部の)大臣たちをすっかり赦免すれば、国法はないことになる。断じてよくない。スンジヤチに委ね、かれら前任の(戸部の)大臣たち・(銀)庫の官僚がすべてどのようにして補填償還するのか、償還できないならば甘んじて

罪を受けるのかを速やかに査明し議して上奏するように。

と断固たる決意を満文硃批で示し、戸部銀庫虧空の原因究明を原任戸部尚書のスンジヤチに委ねた。次章以下で、その戸部銀庫の虧空問題の原因を考察したいが、虧空銀を「任せた数のとおり請け負わない、まったく分厘も償還しない輩」がすべて満洲旗人であったという允祥の上奏からは、虧空の原因が、単なる官僚の横領のみに帰せられるのではなく、その背後には満洲旗人官僚が本質的にもつ旗人社会の構造的な原因が存在していたことを窺わせる。そこで、虧空事件に関与した官僚たちの背後関係をとくに詳細に解明し、虧空問題の原因に迫りたい。ただ、露見した総計二六〇万両に上る戸部銀庫の虧空銀について、摘発された旗人官僚とその詳細な顛末すべてを現存の史料から明らかにすることはできない。允祥自身も述べていたように、雍正初年の時点ですら、物故者が多くなつて虧空の詳細が曖昧になっており、官僚の虧空すべてを追跡調査するのは事実上不可能だった。そうした史料情況で、分析に足る史料を質量ともに有する事件が、戸部尚書ヒフェネ (Hifene 希福納) と、戸部銀庫行走の曾登雲の二案である。

第二章 原任戸部尚書ヒフェネの事件

第一章で述べたように、怡親王允祥の上奏内で問題とされたのは、康熙三十二年（一六九二）以降に在職した満洲旗人の戸部尚書である。このうち、雍正初年に組上に上ったのは、鑲藍旗満洲のヒフェネと鑲紅旗満洲のスンジヤチ⁽²³⁾という、下五旗に属する二人であった。とくにヒフェネには、康熙五十三年に戸部の不正に絡んで革職されたとい

う前科がある。以下でまず、雍正二年（一七二四）六月三日の工部尚書スンジャチの満文奏摺⁽²⁴⁾によって、雍正初年に問題となったヒフェネの虧空事件を概略する。

雍正帝に事の究明を委ねられた工部尚書スンジャチは、原任戸部尚書ヒフェネの遺児であるヒンガン（Hinggan 興安）に対して、ヒフェネに代わって戸部銀庫虧空の責任の一端を請け負うよう命じたが、「家産以外何もない」と当初ヒンガンは応じなかった。スンジャチがヒンガンの家の財務を担当する家人を召喚し、拷問で自白を強要するにおよび、生前ヒフェネが家人たちをつかつて三六万両もの銀を子ヒンガンの家に運び蓄えさせた事実が明らかになった。スンジャチは家人から得たこの証言をヒンガンに突きつけたが、ヒンガンは父ヒフェネから銀を委ねられたことは認めたものの、その銀は二八万両であり、そのうち二二万両は公務で消費し、その他の銀の所在は知らないと言いつ張った。

ヒフェネが戸部尚書在任中に家人たちに命じて戸部銀庫の銀三六万両を子のヒンガンの家に移させたことが事実なら、「家産以外何もない」と主張するヒンガンは（公務で使用したと主張する二二万両を差し引いても）なお一四万両もの銀を隠匿していることになる。この隠匿事実を知った雍正帝は、殊批でヒンガンの革職と、スンジャチ・刑部の合同による事実究明とを指示し、徹底的にヒンガンが銀を隠匿した事情の追究を命じた。

雍正帝のこの厳命に対して刑部から報告が為されたのは、同年一二月であり、筆頭上奏者は尚書セルトゥ（Sertu 塞爾圖）である⁽²⁵⁾（当時スンジャチは、第三章で詳述するように、戸部銀庫清查における不正が露見して逆に糾弾されている最中であつた）。このセルトゥは、雍正帝の腹心である鑲紅旗和碩莊親王允祿（康熙帝十六阿哥、雍正帝の異母弟）の麾下

に属して⁽²⁶⁾いたから、下五旗の旗人とはいえ、旗王の允祿を通して雍正帝の意思を直截に反映することができると立場にあったと考えられる。セルトゥはヒンガンが隠匿しているはずの銀一四万両の所在を追究したが、拷問を受けてもヒンガンはやはり知らないと言いつ張った。ただその過程で康熙五三年にヒンガンの亡父ヒフェネが、銀二万三六〇〇両を何者かにゆすられていた事実が蒸し返された。六部の尚書がゆすられて銀を融通していたこの事件については、『大清聖祖仁皇帝実録』卷二五九、康熙五三年六月丙子(六日)条に、

是れよりも先、原任戸部尚書希福納^{ヒフエネ}が叩闇し告げるに、伊の家人長命兒等は、惡棍桑格、存住、趙六、明図、屠巴海、原任左副都御史壽鼎の子常有、雅代、達爾布、七十、鄂羅、太監李進忠、鄧珍、楊茂生、陶国泰、王国柱、曹貴德、陶進孝、蘇国用等と夥同し、伊の家の財物を訛詐し、又家人等を放出する款を強勒すと。上、領侍衛内大臣侯巴渾德^{バフンデ}に命じて、内務府総管と共に査奏せしむ。

と記されている。すなわち、ヒフェネの家人長命兒なる者が、他の惡棍と共に謀して主人の財産をゆすり取り、それをヒフェネが訴えてた事件であるが、仮にも戸部尚書であつたヒフェネがゆすられるままであつた原因は、惡棍らの身元にあつた。領侍衛内大臣侯バフンデイ(Bahūndei 巴渾德)が調査した結果、かれらが、誠親王允祉(康熙帝三阿哥)・貝子允禔(同九阿哥)・敦郡王允禩(同十阿哥)・貝子允禩(同十四阿哥)・允禩(同十五阿哥)・允祿の配下であることが判明したのである。特に誠親王允祉と貝子允禩は鑲藍旗旗王であり、⁽²⁷⁾やはり鑲藍旗滿洲旗人のヒフェネと密接な関係にあつたと考えられる。

結果として、ヒフェネの家人長命兒らは斬刑、桑格らは絞刑、また諸阿哥の太監らはヒフェネをゆすつた明白な

証拠は出て来なかったものの、太監の身で外事に関与した罪で絞刑と定められた。しかし事件はこれで終結せず、ヒフェネの別の家人虎児なる者が、戸部における主人の不正を密告するという挙に出ている。その密告によりヒフェネがさらに戸部銀庫の銀九万七〇〇両を掠取し、当時の戸部郎中もそれを黙認していたことが露見した。⁽²⁸⁾この銀が、雍正初年に論議されるヒフェネの不正銀の一部であることは疑いない。ヒフェネは死罪を免れたが、約一〇年後、かれの子孫がその罪を償うことになるのである。

ここで重要なのは、ヒフェネが戸部銀庫より掠取した銀の一部が太監を経由して諸阿哥の懷に流れ込んでおり、諸阿哥の勢力を背景とした太監の横暴に、満洲大臣ヒフェネが抗し得ず、訴え出ざるを得なかったという事実である。この事実から考えると、後にヒンガンが自身の身内をも巻き込む苛烈な拷問にも屈せず亡父ヒフェネの掠取した銀の所在を明かさなかったのは、隠匿しているからではなく、蕩尽しつくしたからでもなく、亡父ヒフェネと同様すでに諸阿哥の搾取を受けていたからではないだろうか。結局、原任戸部尚書であるヒフェネが請け負って償還すべき銀を完済するために、ヒフェネ・ヒンガン父子の家産を該旗、すなわち鑲藍旗に委ねて官に没収させることになった。さらにヒンガンは牢に繋がれ、一年の期限内に、隠匿している銀を償還し完済すれば罪を許されるが、さもなければ妻子とともにボーイ (booi 包衣) 身分の最下層であるシンジエク (sinjeku 辛者庫)⁽²⁹⁾に入れられることになったのである。ボーイとは元来入関以前の家僕・罪人・戦争捕虜に起源をもつ、皇帝・旗主に仕える私的隷属性の強い存在であり、八旗の一部としてボーイニルやホントホ (honoho 管領、半個ニル) に組織され、一般の旗人とは区別された。またこの事件でもうひとつ注目すべきは、頻出する家人⁽³⁰⁾の存在であり、かれらは、旗人官僚で

ある主人に随行してその手足となり、往々にして主人の職務を輔佐——場合によっては代行——していた。こうした家人身分の者が枢要な職務に関与していたことは、歴代王朝においても財政問題の一因であつたが、清朝の場合⁽³¹⁾はその傾向がさらに顕著だつたといえよう。次章で論じる虧空事件は、旗人官僚の家人が直接戸部銀庫の事務に携わつた結果、起つた事件である。

第三章 原任戸部銀庫員外郎ソジュの家人曾登雲の事件

康熙年間に戸部銀庫の事務に携わり、そのため償還を負担させられたのは、第二章で述べたヒフェネら、尚書等の高官のみではない。以下で考察する事件は、戸部の下級官僚の家人（*booi niyalma*）にすぎない曾登雲（通称は曾瞎子）なる者が、主人に従つて戸部銀庫での職務に関与していたために銀の償還を負担させられ、さらにその過程で不正が露見したという事件である。雍正二年（一七二四）九月六日に工部尚書スンジャチが上奏した満文奏摺⁽³²⁾を全文訳出してこの事件の経緯を述べる。

奴才スンジャチの謹んで上奏することは、答え上奏する為である。原任（戸部銀庫）員外郎ソジュの家人曾瞎子に任せ償還させる銀五万両を厳しく催促するとき、曾瞎子の呈した書に「我は清苑県の民、名は曾登雲。我が父に従つて京師で商売をしていた。ソジュの父バイドウ（*Baidu* 白度）が塩差（巡塩御史）に派遣された後、我々父子を信用できると事務を処理させるために連れて行つた。ソジュは銀庫員外郎となつた後、また我を事務を処理させるため（戸部銀庫に）随行させた。我が家産は銀三〇〇〇両に値する。これをすぐに換金して納

めたい。我には曲周県に塩の販売所 (uradai-ba) がひとつある。我が前に虧欠した長蘆の塩課銀一万八〇〇両余を上奏して、今長蘆の塩商の事件に入れて、一二年 (年賦) として併せて完納させる。毎年の、併せて完納させる銀を差し押さえた以外、なお銀二二〇〇両が余る。我は甘んじて銀三万両を請け負って、また長蘆の塩商の事件に入れて、期限通り、併せて完納させてほしい」と言っている。奴才我がいかにだまし問うても、揺らぐ答える。かようなので、銀三万両を任せた。奴才我は、ただ (曾登雲に) 錢糧を任せることはできないのではないかと危惧する。もしもかれの民名 (ingen i gebu) を出し記さないならば、地方官たちに書を送って催促させるとき難しいと考えて、「ソジユの家人、民曾登雲」と記した。全く詳しく調べることはできず、そのままかれの呈した通り愚かにも上奏している。奴才我は、主の恩を受けたことは甚大である。我は能力がなく、愚劣に処理したことを出し、恐懼し謹み答へ上奏した。

すなわち、戸部銀庫員外郎ソジユに随行して戸部事務に關与していたために銀五万両の償還を負擔させられた曾登雲は、それ以前に長蘆塩課の滞納問題に塩商として關与しており、別(33)に毎年一五〇〇両 (二万八〇〇〇両 / 一二年) を償還する義務をすでに負っており、それを差し引くと年に二二〇〇両の利益しか残らないはずであるが (すなわち曾登雲の一年の収入は三七〇〇両となる)、それにもかかわらず曾登雲は銀三万両を戸部銀庫に返済するという。ただ償還額を五万両から三万両に減額した上での要求であるから、これは曾登雲にとつて都合のよい嘆願ではあるが、なぜかスンジャチは減額を認めてしまっている。このことが雍正帝の怒りと不審を誘い、吏部と刑部の介入を招く結果となった。

一カ月後の一〇月六日に吏部と刑部が合同で奏摺⁽³⁴⁾を提出したが、吏部の筆頭上奏者は雍正帝が頼みとする尚書口ンコド (Longkodo 隆科多) であり、刑部の筆頭上奏者は領侍衛内大臣・尚書アルスンガ (Arsungea 阿爾松阿) である。後年、ロンコドは種々の不行跡・不正事件で断罪されるが、この曾登雲の虧空事件に関与していた形跡はなく、第三者的立場だった。一方のアルスンガは、雍正帝と対立する廉親王允禩 (康熙帝八阿哥) の朋党の領袖的存在であり、皇帝派ともいべきロンコドとは牽制し合う立場にあつたと考えられる。しかもアルスンガは後述するように長蘆塩課滞納問題に関してすでに雍正元年に現地調査を担当しているから、当時ロンコドが自身の利害に係しないこの曾登雲の案件について、アルスンガを無視して事実を歪めた奏摺をあえて提出したとは考え難く、したがってこの奏摺の内容は、事実と見なしてよいであろう。雍正帝の嚴命を受けたロンコドは、曾登雲を拷問して自白を引き出すことに成功したが、それによって曾登雲の正確な身分、莫大な財産、さらにスンジャチが私的に便宜を図って、曾登雲が負担すべき庫銀の償還額を減額していたことも同時に判明したのである。以下で詳しくみていこう。

自白よりまず判明したことは、曾登雲はもともと直隸保定府清苑県の民籍にあつたのだが、すでに康熙四四年に父子ともども自分たちの身柄を銀六〇両で監察御史バイドウ (戸部員外郎ソジュの父) の家に売って満洲旗人社会の家人身分となつていたという事実であつた。曾登雲父子が民籍を捨てて満洲旗人の家人身分となつた目的は、曾登雲が供述中、「原任銀庫員外郎ソジュに従い庫で行走した。ここで我は産業を興し (ede bi boo boigon jibufi)」と前置きして自らの財産を自白しているように、家人身分を利用して財を蓄えることにあつたと考えられる。また、

前述のスンジヤチの奏摺中に、曾登雲の供述として「ソジュは銀庫員外郎となつた後、また我を事務を処理させるため（戸部銀庫に）随行させた」とあるように、実務の担当者は曾登雲自身であり、私腹を肥やす機会は少なくなかつたと思われる。このほか、旗人官僚の家人が戸部事務に關与して不正を働いた例として、『満洲名臣伝』卷三、鑲藍旗滿洲旗人の戸部尚書ムヘレン（Muheren 穆和倫）の伝に、

（康熙）五十二年四月、戸部の吏が包攬索銀し、穆和倫^{ムヘレン}の家人も亦受賄するに因りて、部は二級降して調用せしめんと議す。

とあり、曾登雲もそれと同様なのであろう。事実、曾登雲は、以前申告した額を遥かに上回る家産を所有していた。以下は、その曾登雲が自白した財産目録であり、括弧内の数字は、調査を担当した官僚が銀に換算した資産価値である。

保定府の住居六二間（銀三三〇〇両）、田地八頃五〇畝（銀一四〇〇両）、曲周県の塩の煮沸場・塩引九五〇〇道（銀二万三二五〇両）、現有の塩三〇〇〇包（銀九〇〇〇両）、内官監の借家一七間（銀五五〇両）、曲周県の塩鋪（銀一八〇〇両）、錦州中後所の趨四万塊余（銀二〇〇〇両余）、家蔵の糧食七〇〇石（銀一五〇〇両）、天津衛の塩它的麻三万斤（銀六〇〇両）、管河同知盧襄の借金（銀一五〇〇両）、浙江紹興府会稽県の王千里の孫王其相の借金（銀二〇〇〇両）、会稽県の民沈思成の借金（銀一五〇〇両）、原任尚書ムヘレンの長男ムリク（Muliku 穆里庫）の借金（銀一〇〇〇両）、原任直隸滿城県知県楊景廉の借金（銀七〇〇両）、誠親王府太監張起鳳の借金（銀五五〇両）、世子弘晟のハハジュセ⁽³⁵⁾（hahajuse 哈哈珠子）⁽³⁵⁾ ジョルホ（Jorho 卓爾和）の借金（銀三〇〇両）、世子弘晟のハハジュ

セ尹国梁の借金（銀一〇〇〇両）。

目録の前半は、曾登雲の家屋などの不動産と塩務関係の財産である。前述したように曾登雲は長蘆の塩商でもあり、その経験と才覚を見込まれて、ソジュの父バイドウが広東巡撫御史に任じられた際に随行したという前歴がある。目録の後半には曾登雲が銀を貸与した相手の名が記されており、曾登雲が金貸しを営んでいたことも分かる。この財産目録から判断すると、曾登雲は商人でありながら自身を売り、満洲旗人の家人身分となることで殖産に成功したといえるのである。また、曾登雲が戸部銀庫における自身の立場を利用して、戸部の貯蔵銀を横流ししていたことも露見した。前述の曾登雲による自白の後段には、

さらに康熙六〇年、世子弘晟が我（曾登雲）を派遣し、銀庫書辦の呉幹・朱倬を呼んで連れて来て事情を含ませると、我は呉幹・朱倬の代わりに銀四〇〇〇両を（戸部銀庫から持ち出して世子弘晟に）与えた。康熙六一年、我自身は同知捐納、我の第四弟曾栄は知州捐納のため、（銀庫に納めるべき捐納銀を世子弘晟に）三〇〇〇両を払った。世子の質屋が賊に襲われたため、（我は）質屋に銀一〇〇〇両を（銀庫から）補充し与えた。物品を質入れた輩にまた庫銀一〇〇〇両で賠償した。

とある。以上の曾登雲の自白を合計すると、曾登雲は実際には銀五万九〇〇〇両に換算できる財産を所有していたことになる（財産には貸与銀・不正に融通した庫銀も含まれる）。

ここでまず注目したいのが、曾登雲の財産目録の中に見える世子弘晟なる人物である。弘晟とは、雍正帝の異母兄である誠親王允祉の嫡子であるが、この弘晟の質屋の損害をなぜ曾登雲が賠償しているのか。また、曾登雲が金

貸しをしていた相手には誠親王府太監・世子弘晟のハハジュセなど、弘晟の身邊に仕える者たちが名を連ねていることから、曾登雲と弘晟との密接な関係が窺い知れるが、弘晟のような高位の宗室と、下級官僚の家人身分に過ぎない曾登雲との、この両者の関係は一体何に起因するのだろうか。ロンコドの奏摺の後半部分より両者の関係を考察してみたい。

曾登雲の自由によれば、かれは銀庫の虧空銀の償還を負担させられた後、親戚の楊三哥なる者を仲介としてスンジャチに接触を図り、償還額を三万両に減額してもらえよう頼み込んだという。この楊三哥も吏部尚書ロンコドの訊問を受けており、その供述から曾登雲と世子弘晟の密接な関係が何に起因するのかが判明する。ロンコドの訊問に対するこの楊三哥の供述を要約すると、以下の通りである。

すなわち、楊三哥は鑲藍旗ボーイのリジュ（*Li Ju* 李柱）のホントホに所属する閑散であり、曾登雲の親戚であるという。曾登雲は償還を負担させられた銀庫の虧空銀五万両のうち、三万両だけを引き受けて償還したいとスンジャチに呈文を差し出したが、スンジャチは受け取ってくれなかった。そこで楊三哥が曾登雲の家に来たとき、曾登雲は楊三哥を仲介として、スンジャチへの接触を図った。というのは、かつて同知の馬黄なるスンジャチの親戚が、「我々の王府の銀（*meni wang ni booi menggun*）」を三千両借金したとき、スンジャチが馬黄の保証人となったが、馬黄が借金を返済しないために、楊三哥がスンジャチのところに返済の催促に行っており、両者は顔見知りだったからである。そうした事情で楊三哥はスンジャチのところへ頼みに行ったが、スンジャチは「錢糧に関係したことに、汝はまったく口を挟むことはできない」と楊三哥を追い払ったため、楊三哥は二度とスンジャチのところに行つ

たことはないという。

以上の内容で注目すべきは、まず曾登雲の親戚楊三哥が鑲藍旗のボーイであるということ、王府に属していることである。前後の文脈を検討してみると、この王府が前出の誠親王府を指していることは間違いない。すなわち楊三哥は鑲藍旗誠親王府に所属する鑲藍旗ボーイなのであり、曾登雲と誠親王府との密接な関係もひとつにはこの楊三哥に求められよう。さらに、この奏摺からは断定こそできないが、曾登雲の直接の主人であるソジュも誠親王府に属していた鑲藍旗人である可能性がきわめて高いと考えられるから、このソジュと誠親王允祉との関係についてさらに検討を加えてみたい。

戸部銀庫員外郎ソジュの身元に関する記載は管見の限らないが、その父であるバイドウが巡塩御史の任にあったのは、康熙四四年のことである⁽³⁶⁾（同年に曾登雲らはソジュの家に身柄を売っている）。『康熙起居注』の康熙四五年一月九日の条に、御史の員缺が吏部より上奏される記載があり、ここに御史「鑲藍旗拜都」の名が確認できる。巡塩御史の任期は一年であるから、この御史「鑲藍旗拜都」は、同四四年任官の広東巡塩御史バイドウと同一人物である。さらに『八旗滿洲氏族通譜』を検索すると、巻一九の「トゥンギヤ（Tungiya）地方トゥンギヤ氏」に鑲藍旗の「御史バイドウ」の名が確認できる。同氏族にはバイドウの子にあたる世代に「員外郎ソジュ」の名も確認でき、世代関係・官職・名前とも一致する人物二人が、唯一この氏族のみに確認できる。以上のことから、戸部銀庫の案件で審議されている戸部銀庫員外郎ソジュとその父である巡塩御史バイドウを、鑲藍旗滿洲人として間違いないであろう。この事実に加えて、さらにソジュの家人である曾登雲の親戚楊三哥が鑲藍旗誠親王府に所属している

以上、曾登雲と、その直接の主人であるソジュもやはりこの誠親王允祉麾下に属していた可能性は高い。

以上の傍証から、戸部銀庫員外郎ソジュとその家人曾登雲の主従が、鑲藍旗誠親王允祉麾下にあったことは確認できたであろう。因みに原任尚書ムヘレンの長男ムリクなる人物も曾登雲から借金をしているが、これはムヘレンも原任戸部尚書であり鑲藍旗滿洲旗人だからだと考えられる。⁽³⁷⁾このように、曾登雲に対する訊問の過程で浮上した人物の多くは、鑲藍旗に関係するという共通点があり、

鑲藍旗和碩誠親王允祉・世子弘晟

鑲藍旗誠親王のボーイ楊三哥

鑲藍旗旗人ソジュ—家人曾登雲

という、鑲藍旗内の主従関係を利用した旗王による不当な強取が、戸部銀庫の虧空問題の一因になっていたことを指摘できよう。

第四章 虧空事件の事後処理とその背景

前章で考察した曾登雲の虧空事件の経過をまとめてみると、以下の通りである。康熙四四年に、直隸保定府清苑県の民曾登雲は、自らを鑲藍旗滿洲旗人の戸部員外郎ソジュの家に売って家人となり、八旗の主従関係の枠組みに組み込まれ、戸部銀庫で行走していた。また長蘆の塩商としての才覚も手伝ってか殖産に成功し、かれの親戚楊三哥が属する鑲藍旗和碩誠親王允祉、その嫡子である世子弘晟とその身邊の者たちとも深い関係をもつに至り、戸部銀庫の銀を密かに世子弘晟に融通するなど不正を働いた。戸部銀庫で行走していたため、雍正初年には戸部銀庫虧

空のうち銀五万両の償還を請け負わされることになった。そこで曾登雲は楊三哥を仲介として、虧空問題を担当した尚書スンジャチに接触を図り、賠償額を銀三万両に減額してもらえようように働きかけ、結果として認められたが、雍正帝の怒りを買ひ、吏部と刑部の介入を招いた。そして拷問を受けた曾登雲の自白により、曾登雲が、正確には民ではなく満洲旗人の家人であること、スンジャチに申告していたよりも遥かに莫大な家産を有すること、鑲藍旗を中心とした曾登雲の対人関係、とくに鑲藍旗宗室の弘晟と共謀して戸部銀庫で不正を働いていたことが明らかになったのである。

吏部尚書ロンコドらは以上の情況を考慮した上で処罰案を上奏した。主犯曾登雲を当座は牢獄に繋ぎ、一年以内に銀五万両を償還するならば、例に照らして級を減らし、黒龍江に流罪の上、現地の披甲に奴僕として与える。もし期限内に償還できないならば、即刻処刑する。その場合、かれの子や弟たちに償還させる。楊三哥は、親戚の曾登雲とスンジャチとの仲介役を果たして結果的に国庫の銀を損なわせたので、三姓への流罪とする。スンジャチは、尚書でありながら曾登雲や楊三哥の頼みを聞き入れ国庫の銀を損なった罪により、革職の上かれにも虧空銀を償還させる。世子弘晟には曾登雲から不正に融通を受けた銀を償還させる。

この奏摺に対して雍正帝は「このことを審理し、明らかにしたことは甚だ嘉すべし」と満足げに満文硃批を記し、ロンコドらの処分案を認めている。ここで注目すべきは楊三哥に下された処分である。かつてならまず所属王府に送られ、最終的にブトゥハ⁽³⁸⁾ウラ (Butha Ula 打牲烏喇) に流罪となることを、楊三哥は所属王府を経由せず直接三姓への流罪とされた。ブトゥハ⁽³⁸⁾ウラ総管衙門の所在地は現在の吉林市の北であり、三姓はさらに北方の、松

花江下流域の新満洲の駐防地である。ともに北方の辺地であるが、両地には決定的な違いがあった。ブトゥハルウラ総管衙門の管轄が、京師の八旗と同様に、内務府（上三旗）属下と下五旗属下とに別れていたことである。すなわち、当該地で採集される貂の毛皮や淡水真珠などは、内務府属下の採集分は宮廷財政を掌る内務府に送られ、下五旗属下の採集分は、京師における各々の下五旗の王府に送られるなど、両者は明確に分離していた。⁽³⁹⁾当然、件の誠親王府もブトゥハルウラに採集のための構成員を組織しており、仮に楊三哥がブトゥハルウラに流罪となったとしても、当該地の身内の組織に配されるだけで、国法を犯したにも拘わらずその処遇は、誠親王府の意のままとなってしまう。それを避けるため、ブトゥハルウラではなく、三姓の新満洲の駐防八旗に楊三哥を流罪とするよう、口ンコドらは上奏しているのである。なお、この流刑地変更については伏線が存在する。この曾登雲の案件が審議される半年前の雍正二年三月二〇日、宗室の鑲藍旗輔国公、メンドウ（Mendu 們度）麾下の閑散雅宝が、閑散滿倉の妹・妻・女僕を姦するという事件を起こした。同日の『雍正朝起居注冊』によれば、雍正帝は刑部に対し、

雅宝の情由は悪むべし。着して三姓処に發往し当差せしめよ。余は議に依れ。再た下五旗の王等の属下の人の、問罪し發遣する者は、部が議して俱に各該打牲処に發往するも、若し該王の打牲処に發往せしむれば、数年の後、伊の該管の王等が仍りて私自に回せしめること、之れ有り。嗣後、該門上が部に送りて發遣する者は例に照らして各打牲処に發往するを除きたるの外、其の公事に因りて治罪し發遣する者は、其の該門上の打牲処に發往するを停め、皆其の罪の輕重を量りて、三姓、黒龍江等の処の地方に發往せしめよ。着して例を定めて議奏せしめよ。

と命じている。すなわち、従来は下五旗の旗王麾下の者をブトゥハハウラ（打牲処）に流罪としても、現地の王府の採集組織に送られるだけで、しかも数年もすると、主人である旗王が密かに罪人を京師に呼び戻してしまう。ゆえに、今後罪人は王府内での罪は別にして、公の罪を犯した旗人は、三姓や黒龍江に流罪とせよ、と雍正帝は厳命しているのである。雍正帝は罪を犯した旗人や家人の処遇が、主人である旗王の府内で処理されることを危惧しているのであり、その裏面には旗王とそれに隷属する旗人たちとの密接な関係が窺えよう。当時の雍正帝の関心は、八旗内における、旗王と旗人との主従関係の闡明・分断にあつたから、家人である曾登雲と、曾登雲の直接の主人である満洲旗人と、さらにはその満洲旗人が所属する旗の旗王との関係——この場合は誠親王允祉父子を頂点とする、鑲藍旗内の主従関係——は、是が非でも剔抉すべき関係だつたはずである。

こうした背景を考えれば、雍正帝が、曾登雲の問題に固執したのも頷ける。というのは、雍正帝は、曾登雲も関与していた長蘆塩課滞納問題についてすでにある情報を予め得ていたからである。曾登雲がかつては長蘆の塩商であり、康熙末年からの長蘆塩課の虧欠を一二年賦で償還する義務があつたことは前述した。この案件については雍正元年五月一二日に怡親王允祥らが上奏して⁽⁴¹⁾おり、允祥は塩課滞納の原因として塩場の流出・天候・凶作による塩の販売不振などを挙げている。しかし同奏摺に対する満文硃批からは、雍正帝がこの滞納の真相を看破し、さらに激昂・憤慨している様子が如実に窺える。雍正帝は滞納の真の原因として、官僚による塩商からの掠取・邪な塩商の放埒を挙げるとともに、

……ここ数年塩商から（賄賂を）取つた阿哥たち・部の大臣たち・近仕させる輩・御史たち・趙弘燮・宋師曾、

さらに頭だつた邪な塩商などの輩をことごとく査明し、塩商に問い質し、各々もと得たものを、塩商に密かに（還し）与えるものはことごとく密かに処理せよ。明らかにすべきものは明らかにし、償還させよ。

とこの長蘆塩課の滞納についても宗室の諸阿哥の関与を指摘している。すなわち、長蘆の塩商曾登雲は、戸部銀庫行走としてのみならず、塩商としてもすでに宗室（おそらくは誠親王允祉）の略取をうけていたと考えられるのである。雍正帝もそれを予測していたのであろう。また、領侍衛内大臣アルスンガとともにこの長蘆塩課滞納の案件を担当するよう雍正帝に命じられたのが、戸部銀庫郎中ボルドと同じ藩邸旧人である川陝總督年羹堯の長子年熙であり、さらに長蘆塩の中心である天津の道員に就任したのが、年羹堯の甥の年裕であったことは注目すべきであろう。⁽⁴²⁾八旗の主従関係を悪用した不正に対し、雍正帝も旗王時代からの八旗の主従関係を利用して、事に当たつたのである。

話を戸部銀庫虧空の案件に戻そう。吏部尚書ロンコドラが、鑲藍旗に關係する曾登雲と楊三哥の訊問を担当したとき、当然その脳裏には半年前の同じ鑲藍旗の雅宝の先例と、それに対する雍正帝の嚴命が浮かんではずである。鑲藍旗誠親王府と深い關係にある曾登雲をブトゥハルウでなく黒龍江へ、楊三哥を三姓への流罪とするようロンコドラが処罰案を上奏した背景には、以上のような事情があつたのである。旗王と旗人との關係の切斷に腐心する雍正帝の政策に沿つた裁定であるといえよう（結果として弘晟は雍正二年一月に世子の爵位を剥奪され、閑散宗室に落とされている⁽⁴³⁾）。

本稿で考察した原任戸部尚書ヒフェネと曾登雲の案件が、戸部銀庫の虧空事件の、あくまで氷山の一角に過ぎな

いことは確かであろう。しかしそれでも残存する史料から確認できた案件が、ともに鑲藍旗に関係していることは注目すべきである。なぜならば、戸部銀庫における不正を可能とした一因に、まず旗という帰属集団を単位として旗人官僚の人事問題が考慮される清朝の特質が、密接に絡んでいたと思われるからである。『世宗憲皇帝諭行旗務奏議』巻六、雍正六年九月五日の議によれば、戸部三庫のうち、顔料庫・緞疋庫は、八旗から均等に輪番で警護の旗人を派遣しており、特定の旗のみが庫の警護に関与することは不可能だった。それに対し、総理戸部事務・三庫大臣の怡親王允祥が、

査するに臣の部の三庫を看守する向例は、銀庫は、鑲藍旗の閑散官一員、驍騎校一員、領催披甲二十名を派し、内に在りて看守せしむ。後門の外は、驍騎校一員、領催披甲十名もて看守せしめ、伊の旗内に在りて輪班行走せしむ。

と述べているように、銀庫のみは、鑲藍旗という特定の一旗だけが警護を担当していたのである。銀庫を実際に警護する官らが鑲藍旗人である以上、鑲藍旗が不正の温床となるのは当然の成り行きである。続けて允祥は、

臣等伏して思うに、看庫の事は、甚だ要緊に属せり。今一庫に、或いは一旗が輪流し、或いは八旗が循環し参差して、斉しからず。又看守を専管するの人無し。理として応に官兵を特派し、看守に著落せしむべし。請うらくは、銀庫・顔料・緞疋三庫を將て、俱に上三旗の官兵を派して看守せしめん。

と上奏し、三庫の警護兵を管轄する旗人官僚がいらないという現状の改革を求めた。その結果、紫禁城内の内銀庫（宮廷財政を管理する内務府の銀庫）と戸部銀庫には鑲黃旗人が、顔料庫には正黃旗人が、緞疋庫には正白旗人が警護

専任として選拔され派遣されるようになり、下五旗の旗人たちは警護から外されることになったのである。戸部銀庫の場合、管轄が鑲藍旗から鑲黃旗に移ったことになり、「特定旗による戸部銀庫の警護」という一点において変化はない。この事実から、允祥が問題視したのは、特定旗が警護を専任していたことではなく、旗王の支配から脱却し得ない下五旗の特定旗（鑲藍旗）が警護の任を担っていることにあったと考えられよう。銀庫を警護するのが鑲藍旗人——鑲藍旗旗王の麾下——である以上、戸部銀庫の不正に多く関与し得たのが、鑲藍旗の旗王と旗人であったことは当然のことであろう。筆者が本稿で検討した事例は、偶然取りあげた単なる一事案ではなく、戸部銀庫虧空問題を惹起した幾つかの要因のすべてが構造的に結びついて起こった事件だったといえよう。さらに戸部銀庫の警護が、下五旗の鑲藍旗管轄下から皇帝直属筆頭の鑲黃旗管轄下に移ったという事実は、雍正帝による国家財政掌握が、より一層強固になったことを示す。だがそれと同時に、戸部銀庫の警護が八旗全体の輪番ではなく、上三旗のみに委ねられた事実は、雍正帝の、全官僚・八旗全体の頂点に立つ独裁君主としての側面ではなく、上三旗を掌握する旗王としての側面を色濃く反映している。

さて、曾瞎子の事件から数年を経たこの雍正六年九月になって、なぜ突如としてこの戸部銀庫の警護問題が論議されたのであろうか。この戸部銀庫の警護問題が組上に上った同年の二月四日の上諭で、雍正帝は戸部における誠親王允祉の不正疑惑について言及しており、「戸部及管該旗（鑲藍旗）事務」果郡王允礼らによる調査を命じていることが注目される。その結果、六月二一日には誠親王允祉が、かねてよりの不行状を咎められて郡王に降され、さらに麾下のニルを没収されている。この際、雍正帝が允祉の放埒に対して、

伊の此等の悖逆は、皆伊の子弘晟の致す所に由る。法は姑容し難し。着して弘晟を將て拿え、宗人府に交ねて厳しく鎖禁を行なわしめよ。嗣後、一応の諸王公等に交与せる會議の處、允祉は必ずしも入班せしめず。該衙門、知道せよ。⁽⁴⁵⁾

と命じているように、允祉の罪の原因がすべてその子弘晟に帰されており、弘晟は幽閉されている（後に父親の允祉は親王に復辟）。ここでもまた弘晟の不行状が蒸し返されていることは注目を要しよう。同日の起居注にあるように、「現在惟此一兄」として允祉父子の言動を即位以来容認してきた雍正帝ではあるが、ついに嚴罰を加えたのである。遅きに失した感もあるが、さらにこの二ヶ月後の戸部銀庫警護問題に関する前述の怡親王允祥の上奏は、鑲藍旗旗王である允祉・弘晟の戸部における不正と無関係とは考えがたく、鑲藍旗旗王らの不正に対する抜本的解決の一方策と思われる。

以上のようにして戸部銀庫虧空への対応・解決策が採られる中、雍正八年五月、雍正帝の即位以来戸部事務に携わってきた怡親王允祥は病により薨去する。その直後、数々の不行跡により浮沈の激しかった誠親王允祉は爵位剥奪の上宗室から除籍・幽閉され、その政治生命を永久に絶たれた。そして允祉の悪行を幫助したとして、戸部銀庫で不正を働いたその子弘晟も一層嚴重な拘禁生活を余儀なくされることになったのである。⁽⁴⁶⁾

おわりに

本稿では、雍正初年に明るみにでた戸部銀庫の虧空問題に関して、その背景と原因を考察した。雍正帝が即位後

間もなく、戸部三庫大臣の職を新設して信賴する怡親王允祥を任命し、その配下の戸部銀庫郎中に藩邸旧人ボルドらを送り込んだことは、雍正帝が国家財政の中心である戸部銀庫の虧空問題を深刻に受け止めていたことを示す。また、戸部銀庫で不正を働いた前任戸部尚書ヒフェネ・原任戸部銀庫行走曾登雲という鑲藍旗に所属する二人の事件を考察することにより、いずれの場合にも旗王の圧力が介在することを確認した。旗人が、皇帝を支える官僚という立場よりも、自らの旗王の利害を優先させるという、清朝における独自の支配構造がこうした虧空問題の一因となっていたのである。加えて戸部銀庫は、鑲藍旗のみがその警護を担当するという特殊な事情により、鑲藍旗旗王の存在が際立って重要な意味をもっていた。戸部銀庫は、国家財政の中枢であると同時に、鑲藍旗という特定旗王の影響力が色濃く及ぶ空間だったのである。とくに曾登雲の例では、八旗の主従関係を利用した旗王による国家財政侵食を明確に看取り得よう。

このように、旗王が麾下の旗人官僚との八旗の主従関係を悪用して、清朝の財政を侵食していた例は、正紅旗敦郡王允禩と正紅旗漢軍旗人の総督楊琳との例が夙に先行研究で指摘されているように、周知のことではある。しかしながら曾登雲の事例は、殖産を目論む富裕な商人が、自らを満洲旗人に売ってその家人となり、旗王と癒着しながら国家財政の中枢で不正を働いたという点において注目すべき事例であろう。無論こうした問題は戸部銀庫あるいは鑲藍旗に限った問題でなく八旗全体に見られる事象であり、だからこそ懸案であった。雍正帝はその現状を憂慮し、八旗・財政の双方に対策を講じていったのである。

雍正帝はこの戸部銀庫清查と並行して自身の兄弟たちに対する統制を強化しており、とくに廉親王允禩・貝子允

禧が、アキナ (Akina 阿其那)・セスへ (Seshe 塞思黑) と改名の上幽閉されて悲惨な死を遂げたことは、雍正帝の即位に関する不透明な情況と相俟つて、ともすれば雍正帝の私怨のかつ陰謀的な事件としての側面が強調されがちである。しかしながら、誠親王允祉・世子弘晟と、その麾下の旗人官僚・ボーイ、さらに旗人官僚の家人を含む八旗の縦の紐帯が、横領という方法で国家財政に多大な影響を与えていた例もあり、このため雍正帝は、いちはやく紐帯の断絶に着手せねばならなかったのである。また、一方の雍正帝もかつての藩邸時代 (旗王時代) の麾下の旗人官僚やその一族という、八旗の縦の紐帯を活用して財政上の案件に対処したという事実は、中央官界における八旗・宗室の勢力を考慮した上で清朝財政史を捉える必要性を明示している。

註

- (1) 清朝皇帝權力に関しては、細谷良夫「清朝に於ける八旗制度の推移」(『東洋学報』第五一卷第一号、一九六八年)や、「宗室内におけるハシ権力の確立」を清朝皇帝權力確立に求める石橋崇雄氏の「清初ハシ (Han) 権の形成過程」(『榎博士頌寿記念東洋史論叢』汲古書院、一九八八年)を参照。また当該時期の財政改革に関しては王業鍵「清雍正時期 (一七二三―一七三五) 的財政改革」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第三二本、一九六一年)を参照。

- (2) 杜家驥「清皇族与国政關係研究」(中華發展基金管理

委員会・五南圖書出版公司共同出版、一九九八年) 参照。
なお、雍正朝に対する近年の評価については、岸本美緒「一八世紀の中国と世界」(『七隈史学』二二、二〇〇一年)・杉山清彦「大清帝国史のための覚書——セミナー「清朝社会と八旗制」をめぐって——」(『滿族史研究通信』第一〇号、二〇〇一年)を参照。

- (3) 香坂昌紀「清代の餽送——江蘇巡撫吳存札を中心として——」(『東北学院大学論集』《歴史学・地理学》第一六号、一九八六年)では、皇帝權力伸張をもたらした雍正初年における財政改革の直接の動機を、「即位の事情とそれ

に起因する宗室・八旗内部及び官界の対立勢力の打倒という権力闘争」に求めている（一一六—一一七頁）。

- (4) 岩井茂樹「清代国家財政における中央と地方——酌撥制度を中心にして——」（『東洋史研究』第四二卷第二号、一九八三年）・同「中国専制国家と財政」（木村尚三郎他編『中世の政治と戦争』《中世史講座第六卷》、学生社、一九九二年）参照。

- (5) 岩井茂樹「清代国家財政における中央と地方」、一二三頁。

- (6) 岩井茂樹「清代国家財政における中央と地方」、一四三頁。

- (7) 岩井茂樹「清代国家財政における中央と地方」、一四〇頁。

- (8) 会考府については江橋「会考府考略」（『歴史檔案』一九八五—）がある。

- (9) 雍正帝と允祥の關係については呉玉清「雍正与怡親王允祥」（『清史研究』一九九三—）に詳しい。

- (10) 岸本美緒「清代戸部銀庫黄冊について」（石橋秀雄編『清代中国の諸問題』山川出版社、一九九五年）岸本美緒「清代中国の物価と経済変動」研文出版、一九九七年）。

- (11) 雍正「大清会典」卷四六、戸部、庫藏一、京庫。

雍正初年の戸部銀庫虧空事件からみた清朝支配構造の特質

- (12) 『八旗通志初集』卷一三四、宗室王公列伝六、怡親王允祥。

- (13) 雍正「大清会典」卷四六、戸部、庫藏一、京庫。同史料によれば、戸部銀庫員外郎が滿洲二人に増員されるのは雍正二年のことである。

- (14) ボルドは鑲白旗滿洲のネイエン (Neyen 訥音) 地方フチャ (Tucha 富察) 氏の出身であり、康熙四一年の挙人である（『八旗滿洲氏族通譜』卷二五、『八旗通志初集』卷一二六、選挙表二）。このボルドが当時戸部銀庫郎中であつたことは、同時期の『宮中檔雍正朝奏摺』所収の、ボルドによる複数の奏摺中の肩書きにより明らかである。

- (15) プランタイは、元來鑲白旗蒙古旗人であり、康熙六一年に戸部銀庫員外郎に就任し、のちに正白旗滿洲に編入され巡撫等を歴任した（『滿洲名臣伝』卷四四、布蘭泰伝）。

- (16) 杜家驥「雍正帝繼位前的封旗及相關問題考析」（『中国史研究』一九九〇—四）参照。

- (17) 旗王による麾下の旗人に対する支配・強取については、細谷良夫「清朝に於ける八旗制度の推移」・神田信夫「両広総督楊琳の奏摺について」（『市古教授退官記念論叢編集委員会編『論集近代中国研究』山川出版社、一九八一年）・香坂昌紀「清代の餽送」が、正紅旗敦郡王允祿と正紅旗漢

鈴木

軍旗人の両広総督楊琳との關係を例に指摘している。また、旗王によるニル・旗人の領有については、杜家驥『清代八旗領属問題考察』（『民族研究』一九八七・五）などを参照。

(18) 雍親王の藩邸旧人については、楊啓樵『雍正帝及其密摺制度研究（増訂第二版）』（三聯書店香港分店、一九八一年）↓一九八五年、七八・九二頁参照。馮爾康『雍正伝』（人民出版社、一九八五年）、四九〇頁参照。杜家驥「雍正帝繼位前的封旗及相關問題考析」を参照。いずれもボルドが藩邸旧人であると指摘しており、杜家驥氏はボルドが鑲白旗滿洲旗人であることにも言及している。

(19) 銀庫清查が一旦完了したと思われる同二年六月一八日より布政使專任。

(20) 『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』第二冊、雍正二年四月四日、怡親王允祥、七八九〜七九六頁。

(21) この銀の貯藏量は、岸本氏が利用した戸部銀庫黃冊の数値とはほぼ一致する（岸本美緒『清代戸部銀庫黃冊について』、四九二頁）。

(22) 『八旗滿洲氏族通譜』卷二三、烏喇地方納喇氏の鑲藍旗人揚吉努の裔として、前任戸部尚書ヒフエネが確認でき

(23) 東洋文庫清代史研究室『鑲紅旗檔——雍正朝——』

（東洋文庫、一九七二年）、黃字三号、雍正三年二月二六日、六〜八頁・七四〜七六頁は、罪により世職等を革去されたスンジャチについて記し、当時スンジャチが鑲紅旗滿洲旗人であったことが分かる。

(24) 『宮中檔雍正朝奏摺』第二九輯、雍正二年六月二二日、孫查濟、八二二〜八二五頁。

(25) 『宮中檔雍正朝奏摺』第三〇輯、雍正二年二月二〇日、塞爾圖、一二五〜一二九頁。

(26) 『雍正朝起居注冊』雍正七年一月二八日条。

(27) 康熙帝の諸阿哥の封旗に関しては杜家驥「雍正帝繼位前的封旗及相關問題考析」参照。

(28) 『大清聖祖仁皇帝實錄』卷二五九、康熙五三年六月丙子（六日）条。

(29) シンジェクについては、葉志如「康、雍、乾時期辛者庫人的成分及人身關係」（『民族研究』一九八四・一）を参照。罪によりシンジェクの身分に落された者は、内務府や下五旗の旗主の莊屯などで使役させられ、ボーイよりも下に置かれた。

(30) 皇帝（内務府）・旗王（王府）に属するボーイと、一般旗人の家人（ボーイ・ニヤルマ）の相異については、石橋崇雄「清初ハン（Han）権の形成過程」二六〜二七頁参

照。

(31) 佐伯富「清代における坐省の家人」(『田村博士頌寿東洋史論叢』田村博士退官事業会、一九六八年)・佐伯富「中国史研究」第二、東洋史研究会、一九七一年)参照。

(32) 『宮中檔雍正朝奏摺』第二九輯、雍正二年九月六日、孫奎濟、九七一―九七三頁参照。

(33) 長蘆塩課滯納問題については、雍正元年五月一日に怡親王允祥が上奏している。それによると長蘆の塩商が納めるべき康熙五四年―雍正元年の未納塩課は銀約一六九万両に達し、一二年年賦による分割払いが決定されている(『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』第三〇冊、雍正元年五月一日、怡親王允祥、三七五―三七九頁)。

(34) 『宮中檔雍正朝奏摺』第三・三〇輯、雍正二年一〇月六日、隆科多、二八九―二九三頁・一〇―二五頁。

(35) 『聰雨叢談』卷二二、「哈哈珠子」の記載によれば、ハハジュセとは宗室諸王の側近である。また『宮中檔雍正朝奏摺』第二八輯、雍正元年八月二日、嵩柱、六一―六二頁の奏摺によれば、下五旗の諸王は、京師では内閣学士・侍郎以上、外省では州県官以上の官僚の子弟を、自己の麾下のボーイ・ニルの官員やハハジュセとして登用し、かれらを酷使して苦しめており、雍正帝はその情弊を戒め

ている。

(36) 雍正「広東通志」卷二九、職官志四、国朝。

(37) 東洋文庫清代史研究室「鑲紅旗檔——雍正朝——」、黄字十四号、雍正三年九月二九日、一三―一六・八〇―八二頁参照。鑲藍旗の家屋を管理する鑲紅旗から出された檔案中、鑲藍旗の大臣として尚書ムヘレンの名が確認できる。

(38) ブトウハルウラについては、李澍田主編、尹郁山等編著『烏拉史略』(長白叢書、吉林文史出版社、一九九一年)・趙雄「關於清代打牲烏拉東珠采捕業的幾個問題」(『歷史檔案』一九八四―四)を参照。

(39) 楠木賢道「チチハル駐防シボ佐領の編立過程」(石橋秀雄編『清代中国の諸問題』山川出版社、一九九五年)、三二六―三二七頁参照。

(40) 八旗における旗王と旗人との主従関係と、その関係を利用した財政への侵食は注(17)を参照。とくに香坂氏の論考からは示唆を受けるところが多い。雍正帝が、自身の兄弟に代表される宗室の人脈解明に関心をもっていたことは、香坂昌紀「雍正年間の関制改革とその背景」(『東北大学東洋史論集』五、一九九二年)、二二七―二二〇頁参照。

(41) 『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』第三〇冊、雍正元年五月一日、怡親王允祥、三七五―三七九頁。

(42) 『永憲録』卷二の上に、年羹堯の長子年熙は雍正帝即位により御史に拔擢されたとある。また、『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』第一冊、雍正元年八月二十四日、年希堯、八八三〜八八四頁から、年裕が年羹堯の兄年希堯の子であることが分かる。

(43) 『大清世宗憲皇帝実録』雍正二年十一月庚戌（一〇日）条。

(44) 『世宗憲皇帝上諭八旗』卷六、雍正六年二月四日の上

諭。

(45) 『雍正朝起居注冊』雍正六年六月二一日条。

(46) 『雍正朝起居注冊』雍正八年五月二十四日条。

〔付記〕 本稿は、一九九九年の満族史研究会第十四回大会

（於大東文化大学）における研究報告をもとに作成した。なお本稿は平成二一・二二・二三年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。